HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	コメント３
著者	小松，かおり；KOMATSU，Kaori
引用	北海学園大学人文論集(67)：63-66
発行日	2019-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

【コメント３】

小　松　かおり

このコメントのお話をいただいたときに，世界遺産は嫌いなのですけれども，と大森先生に申し上げたら，それでもいいからとおっしゃるので，なぜ嫌いなのかということをちょっと真面目に考えてみました。

私は，研究の一つでいや応なく観光に関わっています。那覇市にある第一牧志公設市場についての研究です。

ここは私が最初に調査を始めた1989年には普通に市場だったのですが，今や沖縄を代表する観光地になりました。1972年に現在の建物が建ったのですけれども，老朽化が進んでとうとう建替えが決まりまして，2019年３月で今の市場が閉鎖されて建て替えられることになりました（実際は，2019年６月16日に閉場，７月１日に仮市場オープン，2022年に新市場オープン予定）。そのときに，現在の社会で公設市場などというものが必要なのかという議論がありました。観光基地として必要なのだ，いや観光のためだけではないでしょうみたいな議論の中で，一体，第一牧志公設市場というのは何だったのかということを考えました。那覇の市場のことを一緒に考える仲間で「マチグヮー楽会」というグループを作っていて，そこで議論したのですね。

第一牧志公設市場の一番大事な役割は，現在は，やはり観光客を引き寄せているという面なのですけれども，歴史的には，どこの地域の市場もそうであったように，かなり長いあいだ，沖縄の農業と漁業と食文化の結節点として機能してきたわけです。その結果，現在の第一牧志公設市場は，沖縄の食文化のショールームのような立ち位置にもあります。

一方で，この市場は闇市場から始まった市場なのですが，なぜあの場所に市場ができたのかというと，戦後に，米軍が那覇市のあちこちを接収し

たため，住民が戻ってきたときに沼地しか残っていなかったので，そこに人が集まって商売を始め，沖縄のあちこちで土地が接収されていて農業もできないし，あと企業も発達しなかった地域で，小さな商いで食べていく人が本土よりもずっと多かったわけで，その人たちが生きる場として市場ができていったということがあります。

このような現代史を，もうちょっと価値として考えたほうがいいのではないかと考えました。地域史，もしくは生きる場としての歴史というものを見直して，それが最終的には観光資源になったのだということ自体を見直してはどうかというふうに考えたわけです。市場というのはコモンズ，共有資源なのですけれども，市場の価値の中核というのは空間的にも時間的にも何かと何かをつなぐ場ということです。しかも，異なる相のものを水平的につなぐ力が市場というものの一番大きな力だろうというふうに，今考えています。

ここら辺が私が観光と関わって考えたこと，もしくは観光として見られる価値をちょっとずらしてものを考えてみたところです。

つまり，観光的価値と呼ばれているものは，そこに別の価値が横たわっているからこそ価値なわけですけれども，それが分かりやすいものもあれば，分かりにくいものもある。それを，まず見つけるのが人文学の一つの仕事ではないかというふうに考えたわけです。

では，一方でなぜ世界遺産が嫌いなのかというと，それが巨大な場の力が働く社会空間だと想像しているからです。

その力は，さっきの市場に働くような水平な力ではなくて，圧倒的な垂直な力，言い換えると，先ほどから皆さんのご発表で出てきた普遍的なストーリーというものが，何か圧倒的に正しい顔をした力として存在しているところがどうも好きになれないところだよなというふうに思ったわけです。

その普遍的なストーリーに沿うために，変わらないことを求められる。それから，細かいサイドストーリーが切り捨てられる。先ほど鈴木先生のご発表にありましたけれども，そのためには，当事者ひとりひとりにとっ

ての価値が無視されるような力を及ぼすものだというふうに感じて，あまり好きではないなと思っていたわけです。

では，そういう好き嫌いを脇において，人文学の教材としての世界遺産にどういう価値があるかというふうに，ちょっと考えてみました。

さっきの市場の例でいきますと，やはり遺産というのはコモンズ，共有財産なわけで，しかもこれが地域の人の財産でもあり，国の財産でもあり，世界の財産でもあるという多重的なコモンズなわけです。

例えば地域の人にしても国民にしても，価値を担う人たちというのは，固定化しているわけではなくて，それに価値を見出していく中でどんどんコミュニティーがつくられたり編成されていったりする。これは，プロセスとしてのコミュニティーがそれを担っているのだと思います。人文学というものが人間を考える学問であるならば，この人間の動き方といいますか人間の集まり方，プロセスとしてのコミュニティーを考える一つの教材として，この世界遺産というのはいいのだろうというふうには思います。

それから，今まで皆さんの発表の中であったように，あらゆる人が関わっていろんな力が働くので，社会関係的もしくは時間的な見取り図を描くレッスンとしての教材の役割というのはあるだろうというふうに考えました。

ただ，一方で，遺産的価値は，そもそもは誰かすごく限定的な人による何かの切実な表現としてそこに現れて，その価値がつながれてきたからなのではないかとも思います。もともとの価値は，垂直な力であったこともあると思いますが，水平な力として存在してきたところもあるでしょう。世界遺産みたいな巨大な力を扱うことで，垂直な権力みたいなものを水平な力に読み替える，変換するような知というものを我々は学生に教えられないだろうかというようなことをちょっと夢想したりしました。例えば，どうしようもない力としてそこにあるものについて，対話をしたり，交渉したりすることを進めることを，学生と一緒に考えられるのではないかなと思って，そういう生かし方はあるかなと思ったのですが，しかし，そういうことを学生と考えるときに，世界遺産よりももっと無形文化遺産のよ

うなもののほうがいいのではないかとも思います。

というのは，世界遺産というのはさっき言ったように巨大で権力的な存在ですけれども，一方でユネスコの無形文化遺産は，ローカルな多様性を表現するものとして規定されていて，しかも変わっていくことが当たり前であるという前提で考えられています。それから誰がこの無形文化遺産を評価するのかということも曖昧につくられているという面で，世界遺産と随分違った趣をもつものだからです。

担い手重視とか生きている文化の重視，それから価値評価の相対性ということから考えると，世界遺産も扱ってもいいのですけれども，人文学部としてはむしろ無形文化遺産を含む文化遺産全体を教材にしてもいいのではないかというのが，最後に考えたことです。

以上です。